

渡辺仁史

午年の朝 水平線を見ながら

謹賀新年



think the future from

hitoshi watanabe lab.

●始めることについて

■石垣島の元旦

新年の石垣島は、東京とは違う穏やかさで夜が明ける。初日の出を待つ海岸に立つと、水平線がゆっくりと白んでいく。何かを始めるというのは、こういう時間の流れに身を委ねることなのかもしれない（今年は雨の予報ですが、）。

■「今さら?」という問い

東京から石垣島に第二の拠点を作ったのは、五十代になったばかりだった。きっかけは妻の転地療養だった。建築家として作品を残すことはなかったけれど、早稲田での教育と研究には熱心に関わってきたつもりだ。それなりに「できあがった」生活だったと思う。けれど、必要に迫られて考えた。これまでとは違う暮らし方を、今から始められるだろうか、と。

■新しい一步を踏み出すということ

転地療養を石垣島でと決めた時、周囲からは「大変じゃない?」という反応もあった。確かに、若い頃のように身軽ではない。仕事の調整も簡単ではない。でも同時に、これまでの経験を活かし、当時はまだ最先端だった遠隔授業も可能な

ど、新しい暮らし方の中で何ができるかも見えていたし、挑戦もしたかった。

■戸惑いと発見の日々

石垣島での最初の一年は、正直なところ戸惑いの連続だった。大学の授業との調整も、人との関わり方も、東京とは勝手が違う。でも、その「わからなさ」が面白かった。五十年以上生きてきて、まだこんなに知らないことがあるのか、という新鮮な驚き。

■まだ続く道

「始める」ことに、遅すぎるということはないのだと思う。午年は、馬が力強く駆け出すように、前に進む年だという。卒業生の中には、すでに還暦を過ぎリタイアした者も、あるいはその年齢に近づいている層も多くなってきた。でも、人生はまだ続く。建築でも、趣味でも、人との関係でも、何か新しいことを始めてみる。その一步を踏み出せば、案外「うまく」いくかもしれない。

今年も、皆さんにとって良い一年になりますように。



和紙を折って作ったベガサス